心配された大雨台風が東の海に逸れて、ホッと安心した9月20日、第8回の「ギャラクシー賞入賞作品を聴いて、語り合う会」が、文化放送の12階にある『文化放送メディアプラスホール』で開催された。参加者数は、一般46名、学生14名、計60名であった。

今回聴取した番組は第45回ギャラクシー賞の優秀作品、MBS「俺は闘う老人(じじい)となる」93歳元兵士の証言」と、文化放送「ラジオ生ドラマ『火焰太鼓』」の2作品であった。

MBSの作品は、どんな時にも伝えなければならぬテーマがあるという強い意志に基づいてドキュメンタリー番組を作り続けるMBSラジオ報道部の秀作である。メディアホールの素晴らしい音響環境で聴くことで、より心に響いた。戦後63年の今も戦争体験を語り続ける(本多老)を中心とした迫力ある内容に、参加者は圧倒され、聴取後、涙ぐむ方も少なくなかった。

制作したMBS寺澤記者は35歳の若手だが、本多老に「もう来るな」と言われながらも、しぶとく真摯に迫って証言を得た苦労話の紹介があり、同じ制作者に、強い教訓と進むべき道を暗

示させるものであった。

松尾羊一御大の鋭い質問にも、堂々と答え、優秀な制作者が着実に育っていると心強い思いを持った。

文化放送の作品は、少なくなったラジオドラマの復興を目指して、公開で生ドラマを放送したという楽しい番組である。ラジオの大きな魅力に楽しいひとときをラジオで過ごすを、目的として制作された。制作の長谷川実氏と音響効果の玉井和雄氏に来ていただいた。音響効果というスタッフの方を呼んだのは初めてである。試聴後の長谷川氏の説明の後、玉井氏(75歳を過ぎている)の実演を踏まえたドラマ作りの話に、皆驚いたり、感動したり、目の前の音作りは、席を立って人かたまりができる人気であった。

遅くなったが、全面的に協力してくださった文化放送に対して心から感謝申し上げたい。

番組を聴き終わった時に巻き起こる大きな強い参加者からの拍手を聞いた瞬間、長いきつい熱い議論の末に選ばせていただいた作品に、間違いがなかったと安心する一瞬がある。そのためにも、これからずっと続けていきたい。

会の将来のブランドデザイン決定 ギャラクシー賞の応募出足好調

9月理事会報告

9月29日理事会を開催した。

◆出版編集事業委員会

新体制最初の「GALAC」10月号(特集「これでいいのか!? 死刑報道」)の評判はまずまず。11月号は特集「検証! 中国報道」、表紙は中井貴一、ニュースな人たちは篤姫の脚本家、田淵久美子。12月号は小特集として「米国TVドラマ隆盛の秘密」「どうなる? オンデマンドTV」を予定。表紙は二宮和也、ニュースな人たちはヤフージャパンの井上雅博社長を予定している。

◆選奨事業委員会

テレビ部門

ギャラクシー賞上期の8月までの応募が94本です。前年上期(86本)を超えた。

ラジオ部門

今年2回目のギャラクシー賞入賞作品を聴いて、語り合う会(第

8回)を9月20日文化放送のホールで開催し60人参加した。

CM部門

ギャラクシー賞上期の応募は153本で、前年下期より4本多かった。

報道活動部門

11月29日(土)に東京工科大学で同大メディア学部と共催で「ギャラクシー賞報道活動を見て、制作者と語る会」を開く。入場無料だが地方から制作者を招くので交通費、日当を払う必要があり、会からも最高5万円の補助をしてほしい。ラジオの聴く会などの先例を聞いて論議の結果「最高5万円(できれば3万円)」の補助を決定。

◆企画事業委員会

2009年2月18日(木)に都市センターホールでシンポジウムを開く。インターネットで広告収入が落ち込むなどメディア環境が

訃報 名誉会員 岩田糸子さん

ギャラクシー賞のトロフィーをデザインされたガラス作家の岩田糸子さんが、25日未明に逝去されました。86歳でした。岩田糸子さんは日本の近代ガラス作家の第一人者、岩田藤七の長男・久利さんと結婚後にガラス製作を開始。ガラス工芸の発展・普及に貢献され、作品はニューヨーク・メトロポリタン美術館に所蔵されています。謹んでご冥福をお祈りいたします。

お知らせ

2008年会員名簿ができあがりましたので、「会報」とともに同封いたします。ご活用ください。

なお、名誉会員である岩田糸子さんは急逝だったため、名簿にお名前が記載されています。ご容赦ください。

変化しているなかで放送局の経営モデルを考える内容にしたい。放送、中央官庁、インターネットなどの講演者の交渉を進め10月中旬に決めたい。

◆ブランドデザイン答申

創立45周年を機会に会の将来のあり方を検討してきたブランドデザイン小委員会の答申がまとまって報告され、了承された。概要は次の通り。

「放送批評の質の向上を目指して活動を充実させる。正会員を維持拡充し、地方在住会員も参加しやすい活動を行う必要がある。会の活動を支える維持会員の維持・拡充を組織的に進め、維持会員メリットの提示に務める。マイベストTV賞のためのWeb会員で積極的な人には正会員として貢献してもらおう。

事業活動については既存の3事業の一層の活性化と相互の連携を図り、『GALAC』などの財務を改善するよう努力する。新規事業については財務的可能性を厳密に検討して理事会に提案する。今後の事業の維持・拡大を図るため

ギャラクシー賞 マイベストTV賞 2008年9月度投票開始!

ギャラクシー賞マイベストTV賞2008年9月度作品の投票を開始します。正会員の皆さまは、添付した〈正会員専用 投票用紙〉でマイベストTV賞の投票にご参加ください。

リスト以外の作品を推薦できる欄を新設しました。ご活用ください。

ウェブまたは携帯サイトから参加の場合は、投票ページに入室ください。

組織体制を強化する。長期的な将来を見据えた活動については第2次グランドデザイン小委員会を設置して検討する。海外の放送文化、放送批評活動との交流を図るため、会の体力に見合った無理のない計画を立てる」

◇日韓中テレビ制作者フォーラムイン福岡

9月24日から27日まで博多の「アクロス福岡」で開催、日韓中から150人ほどが参加した。放懇会員では志賀名誉会長、音理理事長ら12人が参加。3カ国が3本ずつの番組と若者をテーマにした番組1本ずつを持ち寄って映写し、制作者と参加者が話し合った。今年はコンクール性を強めて参加者全員が投票した上、審査委員が入賞番組を決定した。グランプリにはギャラクシー賞の選奨にも輝いた鹿児島MBCの「やねだん」が選ばれた。来年は韓国の忠清南道で開かれる。(詳細は次号掲載)

◇ギャラクシー賞2009の授賞式日取りは6月2日(火)に決定。

◇正会員の入会承認

北郷裕美さん、酒井恵子さん

◇次回理事会は10月30日(木)午後

かりました。

地デジ移行のための過重な財政負担、ネットに押された放送広告費の落ち込みなど、昨今放送に関してはいくつもの暗い話題が多いように感じます。

大学研究者としての私のテーマはドラマ分析ですし、ギャラクシー賞の選奨などの番組批評を通じて放送界と接点を持つてきました。その中で、地方局のドキュメンタリストなど何人もの優れた作り手に出会ってきました。

いい番組を作る制作者や局に、より多くの制作費が集まる、いわば当然の循環が実現しないものでしょうか。放懇シンポジウムなどの催しを通じて、放送界が元気になる新しい方向性を提起することが、企画事業委員会の使命と思っています。それがひいては、視聴者の利益にもなるのだと信じて頑張ります。

「時代との格闘」を見定める

選奨事業テレビ部門委員長
藤久ミネ

音好宏新理事長は、就任のご挨拶

6時30分から

「出席」音好宏、隈部紀生、小田桐誠、藤田真文、市村元、入江たのし、兼高聖雄、五井千鶴子、小林毅、坂本衛、嶋田親一、丹羽美之、橋本隆、藤久ミネ

新入会員

◇北郷裕美 札幌学院大学地域社会

マネジメント研究センター

◇酒井恵子 日本経済新聞社

会議記録

〔8月〕

出版編集委員会

1日 選奨・ラジオ定例会

14日 選奨・CM定例会

26日 選奨・テレビ月評会

29日 出版編集委員会

〔9月〕

4日 グランドデザイン小委員会

5日 企画事業委員会・

シンポジウムプロジェクト

18日 選奨・ラジオ定例会

22日 選奨・CM定例会

26日 選奨・テレビ月評会

29日 理事会

で、今後は「良質な放送批評とは何かを考え、その位置づけを世界水準にもっていききたい」と話されました。そしてさらにノーム・チョムスキーの「メディアをチェックすることで社会を良くすることができる」ということを引用されています。

これはえらいことになった……が本音です。が、同時にチョムスキーのこのことは、正論として、柔軟に受けとめたいと思いました。

テレビに登場するあらゆる番組は、広い意味で、メディアの「時代との格闘」を示しているといっているかもしれません。その方向を正確に見定め、時代のリアリティを感得する能力を選奨委員ひとりひとりが獲得しなければなりません。とくに地方局からの応募番組からは、全国ネットの番組にも増して、いまの生活と社会の切実な声が響いてくるのを感じずにはいられません。委員のみなさんとの「協働」で、新しい地平を拓いてゆきたいとねがっています。

新入会員自己紹介

復習するは我にあり 川喜田尚

このたび正会員として仲間に入れていただくことになりました。アナログラジオ、テレビからCSと放送業界一筋に三十年、ラジオ小僧としてハガキを書いていた時代から数えると四十年以上も「放送界隈人」をしていることになりました。

最近メディアを学ぶ学生たちに黒澤明、小津安二郎をどれくらいの人か観ているか聞いたところ、学生十人中、黒澤は二人、小津はゼロでした。そもそも小津は名前を聞いたことがないという反応にびっくりしたのですが、我が家の大学生に聞いたところ「知ってるわけないじゃん」というつれない返事。メディアの役割を言う前に自分の子供に対する教育を反省してしまいました。

知識や情報の保存、伝達、共有はメディアの大きな役割です。

初心に帰って、伝えたい番組、残したい番組の共有のお手伝いをさせていただくことが「業界かいわい」の恩返しだと思ふ次第です。どうぞよろしくお願いします。

竹山洋氏を「囲む会」(第3回)を放懇など有志で聞いて

石井清司

竹山洋氏の映像脚本の作家として名を挙げ大成したいという若き日からの執念には壮絶といえるものがあった。それは高僧に筆名を決めてもらうことから始まった。高僧はそれがすぐ実現する「加瀬豪(稼ごう)」とじっくりだが着実な「竹山洋」を選び、彼は後者とし、駆けのぼった。はじめ日活ロマンポルノを書きまくった。作家にあり勝ちな気難しい洪面や陰気さを感じさせたことがない。いつもけろっと周りを溶かしこむ軽妙さひょうきんさで誰にも好かれた。大器だった。努力は見せず、しかし純真、気迫、感性は天与のものだ。多くの天才、時代の寵児と出会う脚本の頂点に立った。「菜の花の沖」「清左衛門残日録」「点と線」。時代の旗手たるその醸す絶妙な文学性。この「集い」でもわれわれを覚醒へ揺さぶり、作家の生身と気迫、秘策、絶叫を惜し気なく自ら解剖してくれた。この瞬間は得がたい体験になった。またやりたい。

耳から入る情報の長所

飯田みか

十代の終わりの2年間、寮に住んでいました。テレビは二百人に1台、許されていたのは夜八時〜十時だけ。大学の近くで一人暮らしをした部屋には、テレビそのものがありませんでした。その頃のニュース源は専ら新聞。ニュースが耳から入らないせいで、当時世間を騒がせたサラ金業者は「ムフジ」、田中角栄氏の後援会は「こしやまかい」と思い込む始末。「たけふじ」「エツザンカイ」だと知った時、テレビやラジオの長所の一つを再認識したものでした。

家にいる間、まるでBGMのようにならずとテレビをつけている伴侶の習慣にはカルチャーショックを受けましたが、そんな生活にも慣れ、いつのまにか私も同じ事をしていきます。

「新・調査情報」編集部に十年ほどいたのですが、今度は「GALAC」でお世話になります。新聞を読みながら一つひとつ立ち止まって考えていた頃の目も忘れずに、テレビやラジオの魅力と付き合っていければと思っています。

ビジネスモデルの変化を実感

元橋圭哉

「この道一筋」的なキャリアパスが主流のNHKでは異例だと思いますが、もともとニュース取材職として入り、地方局で情報番組などを制作↓子ども向けのドラマやハイビジョンの教育番組↓衛星放送の海外中継↓米国テレビジャパン事業の創設↓アジア向けテレビ国際放送の導入とデジタル化↓インターネット展開…と職を転々としてきました。現在は地上・BSデジタル放送の普及・推進や、IPTV等へのコンテンツ提供の枠組み作りを担当しています。放送局の仕事の中では、どちらかというとフリンジ(周縁)の、ないしは新規の業務ではありますが、逆にテクノロジーの進化とそれにとまなうビジネスモデルの変化を日々実感しています。その中で、電波によるジャーナリズム、映像文化、良質なコンテンツの創造と提供、という「放送」あるいは「放送局」の機能・役割が、どう変わっていくのか、変わってはいけないことは何なのか、ということ、自らの思考の基軸に据えていきたいと思っています。

関心は「再びテレビジョンへ」

前川英樹

1964年にTBSに入社しましたが、本当にテレビのことを考えるようになったのは、1968年の「TBS闘争」で、これが「テレビジョンの原体験」といえるでしょう。テレビと私との第一の転換点です。第二のそれは、教養部・制作部を経て1984年総合開発部への異動でした。HDTV(ハイビジョン)に出遭うことで、テレビシステムの再構築を強く意識しました。その後、BS参入を巡る「ミューズ・デジタル論争」等を経験し、1991年に民放連・デジ特委で「地デジ不可避論」を提起しました。以後デジタル化政策に関与しつつ、インターネット時代のテレビを考えることがテーマになります。これが、第三の転換点でしょう。現在の関心を一言で言えば、「Re-Television=再びテレビジョンへ」ですが、その鍵は、メディア環境の変化の中で起こっているテレビの「問題提起能力」の衰退だと考えます。「放懇」でも、そのよきな意識を持続したいと思っています。

新委員長紹介、今期の抱負を語る！

6月21日の通常総会において、第4、5期の新体制が決まりました。就任された4人の新委員長に、今期の抱負をうかがいます。

新たな書き手とテーマに挑戦

出版編集委員長
丹羽美之

「大学教員の片手間で、月刊誌の編集長を務まるんだらうか…」そんな不安を抱えたまま、「GALAC」の編集長を拝命して、はや三か月。無事に二号目をお届けすることができて、ホッとしています。

編集の仕事は予想通り、なかなかのハードワークです。企画会議、原稿依頼や座談会の手配、原稿整理、レイアウト、校正。ようやく印刷所に入稿したと思ったら、次の企画会議が目前に……。

こんな綱渡りの自転車操業を何とか続けていけるのも、知恵袋となつて下さる編集委員の皆さん、頼りになるライターの皆さん、編集実務を熟知した敏腕副編集長、そして優秀な編集部スタッフのお蔭です。

審査の公正性と透明性を高める

選奨事業委員長
小田桐誠

今後は新たな書き手をどんどん発掘し、これまで取り組んだことのないテーマにも挑戦していきます。来年には誌面のリニューアルも予定しています。会員の皆さんも、新しい「GALAC」にご意見、ご感想をどんどんお寄せください。

テレビやラジオなど各部門の委員を経験しながら、選奨事業委員会の委員長に就くことになった。出版編集委員会・「GALAC」編集長に就任した時とほぼ同じ構図で、やや戸惑っている。

「選奨事業委員長とはどんな存在なのか」。理事や会員の間にちよつぱり(意外と大きいのかもしれないが)ズレがあるのではないかと思わ

れる。「選奨事業委員長Ⅱ中二階論」や「統括」という言語明瞭・意味不明な位置づけがあるようだが、その立場は時代や放送環境の変化により変わるのではなからうか。

各部門の審査がより公正性と透明性を高め、公式・非公式問わず何か問われた時の説明責任を果たせる体制作りを各委員長とともに進めていくのが、今求められているのではないかと考える。審査するに当たっては、制作者たちが、「講評や説明に十分納得できないところもあるが、理解はする」と受け止められるような批評眼と広く・深いボキャブラリーが求められると思う。

シンポジウムで、放送界を元気に！

企画事業委員長
藤田真文

このたび企画事業委員長を仰せつ